

国語表現

date: 年 月 日

学習内容：意図すること

注文の多い料理店 宮沢賢治

学籍番号

氏名

注文の多い料理店

宮沢賢治

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、びかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいておりました。「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わなから、早くタンタアーンと、やつて見たいもんだな。」

「鹿の黄いろな横つ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だらうねえ。くるくるまわって、それからどたつと倒れるだらうねえ。」

それはだいぶ山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごつて、どこかへ行ってしまつたくらい山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いで、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起して、しばらく吠つて、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ。」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちよつとかえしてみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔を悪くして、じつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻らうとおもう。」

「さあ、ぼくもちよつと寒くはなつたし腹は空いてきたし戻らうとおもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾も買って帰ればいい。」

「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰らうじゃないか。」

ところがどうも困つたことは、どつちへ行けば戻れるのか、いっつこう見当がつかなくなつていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さつきから横つ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困つたなあ。何かたべたいなあ。」

「喰べたいもんだなあ。」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には、

RESTAURANT
西洋料理店
WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちよつといい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入らうじゃないか。」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしどにかく何か食事ができるんだらう。」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか。」

「はいろうじやないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。

そして硝子の開き戸がたつて、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありませぬ。」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やつぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんざしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただで馳走するんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませぬというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなつていました。

「ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします。」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあつてゐるのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから。」

「ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。」

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだらう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあげようとして、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそはご承知ください。」

「なかなかはやつてるんだ。こんな山の中で。」

「それあそつた。見たまえ、東京の大きな料理屋だつて大通りにはすくないだらう。」

二人は云いながら、その扉をあげました。するとその裏側には、

「注文はすいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういうことだ。」

「そうだらう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかつて、その下には長い柄のついたブラシが置いてあつたのです。

扉には赤い字で、

「お客さまが、ここで髪をきちんとして、それからはその泥を落してください。」と書いてありました。

「これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびつたんだよ。」

「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずつて、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室の中に入つてきました。

二人はびっくりして、互によりそつて、扉をがたんと開けて、次の室へはいつて行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途方もないことになつてしまつと、二人とも思つたのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持つてものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来てるんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによつとぼえらいひとなんだ。奥に来てゐるのは。」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでべたべたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖つたものは、みんなここに置いてください。」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあつたのです。

「ははあ、何かの料理に電氣をつかうと見えるね。金庫のものはあぶない。ことに尖つたものはあぶないと斯う云うんだらう。」

「そうだらう。して見ると勘定は帰りにここで払うのだらうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きつと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫の中に入れて、ばちんと錠をかけました。

